

＊馬嵬の悲劇

唐紀三十四 柔兆涪が（丙申、756 年）5 月から 9 月まで書いた、1 年未満の記録。
肅宗文明武德大聖大宣孝皇帝上之下

至徳元載（丙申、七五六）

1. 五月、丁巳（6 月 6 日日曜日）、魯^ろ兗^い軍は潰滅し、南陽（河南省南陽市）に撤退し防衛した。賊軍はこれを包囲した。太常卿・張自（自には土偏がある）は夷陵（湖北省宜昌市）太守で虢^{かく}王・巨が勇氣と知略があるとして推薦した。玄宗は吳王・祗^しを呼び寄せ太僕卿に任命し、虢^{かく}王・巨を陳留（河南省開封市陳留県）・譙^{しやうぐん}郡（江蘇省徐州市沛県の一部）太守及び河南節度使に任命し、嶺南節度使・何履光と黔^{けんちゆう}中（貴州省貴陽市）節度使・趙国珍と南陽節度使・魯^ろ兗^いの指導者を兼務させた。趙国珍は牂^{そう}柯^{かい}夷（貴州省貴陽市付近の異民族）の出身である。戊辰（6 月 17 日木曜日）、虢^{かく}王・巨は兵を率いて藍田を出立し南陽に赴いた。賊軍はこの報を聞いて、包囲を解いて撤退した。

2. 令狐潮は再び兵を率いて雍丘（河南省杞県）を攻めた。潮と張巡は古くから交流がある。城下で普段のように互いの辛苦を^{ねがら}勞^{らう}って、令狐潮は張巡に説得した。「天下の事は去ってしまったよ。貴殿（^{そつか}足下）が危機にある城を堅守するのは、誰のためなのか？」と。張巡は答えた。「貴殿（^{そつか}足下）は普段から忠義を自認しているが、今日の挙兵のどこに忠義があるのか！」と。令狐潮は恥じ入り退いた。

3. 郭子儀と李光弼は常山（河北省石家荘市付近）に帰還した。史思明は敗残兵を集め、数万の軍勢でその背後を追いかけた。郭子儀は驍^{ぎやうき}騎を選抜し、更に挑戦した。三日で、行唐（河北省石家荘市に位置する県）に至り、賊軍は疲労し、撤退した。郭子儀はこの機に乗じて、沙河（河北省邢^{けいたい}台市に位置する県級市）で賊軍をまた、敗走させた。蔡希徳は

洛陽に至った。安祿山は再び歩騎2万を与え、史思明の元へ北上させた。^{ぎゆうていかい}牛延玠に范陽

(幽州、現在の北京市)等から一万余りの兵を徴発し、史思明を援軍するために北上させた。合わせて5万の軍勢となった。同羅では、黄河に居住する住民の5分の1を曳き落とした。郭子儀は恒陽(河北省保定市曲陽県)に至り、史思明はほどなく至った。郭子儀は溝を深く掘り防塁を高くして史思明を待ち構えた。賊軍が襲来すれば守り、賊軍が撤退すれば追撃する。昼は正攻法で戦い、夜は陣営を闇討ちする。賊軍は休息できなかった。数日経ち、郭子儀と李光弼は討議した。「賊軍は厭戦ムードだ。戦いに打って出るべきだ。」と。壬午(7月1日木曜日)、嘉山(常山の東)での戦いで大いに打ち破り、四万人の首を斬り、千余人を捕虜とした。史思明は落馬し、髻(もとどり)を露わにし、裸足で逃げ去った。暮れまでに、折れた槍を杖に陣営に帰った。そして博陵(河北省保定市の一地方)

に逃亡した。李光弼はこれを包囲して、^{とき}関の^{こえ}声を大いに上げた。ここにおいて、河北十余りの郡は皆、賊軍の守備隊の将を殺して投降した。漁陽(范陽、現在の北京市の一地区)への道は再び閉ざされた。賊軍は往来する者を皆、それは輕騎が官軍のために行こうと秘かに通過する多くの者を捕らえた。漁陽に家のある将士で動揺しない者はいなかった。

安祿山は大いに懼れ、高尚と嚴莊を呼び寄せ、なじった。「汝らは数年来、大丈夫と言って我に謀叛を教唆してきた。今、潼関を守るばかりで数ヶ月前進できていない。それに北への進路がすでに断たれている。諸軍に四方を囲まれており、吾が所有しているのは汴州・鄭州など数州に留まっている。何が万全というのだ？汝らは今から我に面会しに来るな！」と。高尚と嚴莊は懼れて、数日面会しようとしなかった。田乾真が潼関から下りて来て、高尚と嚴莊のために安祿山を説得した。「古^{いにしえ}より帝王が大業を成し遂げるのに、

皆勝敗がありました。どうして一挙に成功できましょうか！今四方を囲む軍が多いと雖^{いんど}

も、皆新規募集されたばかりの烏合の衆で、行軍の経験がありません。我ら^{けいほく}薊北の精銳兵の敵ではありません。何も深刻に心配する必要がありません！高尚と嚴莊の両名は幕僚の元勳です。陛下が一旦この者達を絶縁すれば、諸将がこれを聞けば、内心懼れぬ者は誰もいません！もし上下の者の心が離れれば、臣^{わたくし}は陛下の危機を憂えますぞ！」と。祿山は喜んで言った。「阿浩よ、汝は私の心を開いてくれた。」と。そして直ぐに高尚と嚴莊を呼び、酒宴を催し、祿山自らが彼等のために歌い、酒を酌み交わした。出会った頃のような待遇であった。阿浩とは、田乾真の幼名(小字=小名)である。安祿山は洛陽を棄て、范陽に帰ることが議論されたが、計画はまだ決まらなかった。

この頃、天下で楊国忠の^{きやうこうほうじゆう}驕傲放縱が乱を招いたとして、齒ぎしりをしないものはいなかった。また、安祿山の挙兵が楊国忠を誅する名目だったので、王思礼は秘かに^か哥舒翰を説得して、楊国忠を誅殺するよう抗議の上表をさせようとしたが、翰は応じなかった。王

思礼はさらに三十騎で楊国忠を拉致し、潼関で殺して欲しいと請願した。哥舒翰^{かじよかん}は言った。「このような行為をすれば、翰が謀反人となる。禄山ではないのだぞ。」と。ある者が楊国忠に説いた。「今朝廷の重要な兵力はほとんど哥舒翰^{かじよかん}の手にあります。哥舒翰^{かじよかん}が軍旗を西に翻してきたら、公はどうして危険でないと言えましょうか！」と。楊国忠は大いに懼れて上奏した。「潼関の大軍は強勢であるといえども、後方に軍はいません。万一敗れることがあれば、都はなんと危ないことでしょう。監牧（注1）の小兒（青少年のことと推量する）3千人を選んで、苑中（宮中の庭と推量する）で訓練させてください。」と。玄宗は許可し、劍南（四川省成都市）軍の将である李福德らに担当させた。さらに一万人の兵士を募集して灞上（はじょう）に駐屯させ、楊国忠と親しい間柄の杜乾運を将として任命した。名目は賊軍への防禦だが、その実は哥舒翰^{かじよかん}に備えての軍だった。哥舒翰^{かじよかん}はこれを知り、同様に楊国忠が自分をハメようとしていると恐れた。そして灞上軍を潼関の本隊に編入させて欲しいと上表した。六月、癸未（7月2日金曜日）、杜乾運が潼関に呼びつけられ、他事にかこつけて斬られた。楊国忠はますます懼れた。

注1） 詳細は次の論文を参照。山下將司「唐の監牧制と中国在住ソグド人の牧馬」（京都大学『東洋史研究』2008年66（4）、539-569頁、2008年3月）

ある者が次の様に告げた。陝にいる崔乾祐^{さいかんゆう}の軍は4千人足らずで、皆老いて弱っている、備えがない。玄宗は哥舒翰^{かじよかん}に使者を派遣し、進軍して陝と洛陽を奪還するように命じた。

哥舒翰^{かじよかん}は上奏して言った。「安禄山は長らく兵を慣らしており、今反逆したばかりです。

どうして備えをなくすことができますでしょうか！これは間違いなく我をおびき出すための咬^{かい}ませ犬^{いぬ}たる軍です。もし、討って出れば、正に敵の思うつぼです。且つ賊は遠方より来ており、短期戦が有利です。官軍は険しい地形を利用して賊軍を抑えているので、堅守が有利です。況^{いわ}んや賊軍は残虐行為で民心を失い、兵の勢いは日増しに衰え、そのうち内部分裂することでしょう。その機に乗ずれば、戦わずして敵を虜^{とりこ}にできますぞ。要は成功すればいいのです。何ぞ速戦の必要がありましょうか！今、諸道で多く徴兵しているもののまだ集結しておりません。どうかこれをお待ちください。」と。郭子儀と李光弼も玄宗に申し上げた。「北に兵を率いて范陽を取らせて下さい。その巢穴を転覆させ、賊の妻子を人質に取り挑発すれば、賊軍は必ず内部崩壊します。潼関の大軍はひたすら守りを固め賊

軍を疲労させれば良いのです。軽はずみに討って出てはなりません。」と。楊国忠は哥舒翰が自分を謀ろうと疑い、玄宗に次の様に言った。賊軍には備えが無いのに哥舒翰は逗留して勝つチャンスを失おうとしています。玄宗はもつともだと思い、連続して中使に速戦するよう催促した。まさに項背相望む（注1）状況だった。哥舒翰はどうしようもなくなり、胸に手を当て慟哭した。丙戌（7月5日月曜日）、兵を率いて潼関を出た。

注1） 項背相望む；前後の人が共に振り返る。転じて、大勢の人が続けて絶えない様子。

己丑（7月8日木曜日）、靈宝（河南省三門峽市に位置する県級市）・西原にて崔乾祐の軍と遭遇した。崔乾祐は南に山が迫り、北に河が阻む70里に及ぶ狭隘な道の先にある険阻な地形で待ち構えていた。庚寅（7月9日金曜日）、官軍と崔乾祐は会戦した。崔乾祐は険しい地形に伏兵を配置した。哥舒翰と田良丘は河の流れの真ん中に船を浮かべ、軍勢を観察した。崔乾祐の兵が少ないと見るや、諸軍を前進させた。王思礼らの将は精銳5万を率いて前衛におり、龐忠らの将は残り10万の兵を率いてこれに続いた。哥舒翰は3万の兵を率い、河の北側にある丘に登り官軍を見て、太鼓を鳴らしてその勢いを助けた。崔乾祐の陣営から出た兵は一万人に過ぎず、什伍（軍隊で、10人または5人の兵士の組み合わせ。また、その隊伍。）が離れたりひつついたり、進んだり下がったりと、星座の様にばらけていた。官軍はこれを見て笑った。崔乾祐の厳選した精銳兵は最後尾に陣取っていた。丘では已に交戦していた。賊軍は逃げ出したいかの様に軍旗を伏せていた。官軍は油断して備えが無かった。その瞬間、伏兵が現れ、高所から木や石を落とし、士卒のかなり多くを殺した。道が狭く士卒は束のように固まっており、槍や矛は使いようがなかった。哥舒翰は氍毹車（フェルトを張り巡らせた車。北方民族が用いていた。）や駕車（駕籠を巡らせた車）を前面に持ってきて、賊軍にぶつけようとした。昼過ぎに東風が急に吹き荒れ、崔乾祐は草を積んだ数十台の車で氍毹車の行く手を遮り、火を焚きつけた。官軍は目を開けることができなくなり、妄りに同士討ちした。煙の中に賊軍がいると伝わり、弓や弩の使い手が集まり射掛けた。日暮れとなり矢が尽きたが、賊軍がいなかったのが分かった。崔乾祐は同羅の精銳騎兵を南山を過ぎたあたりから派遣し、官軍の背後から討って出た。官軍の前後は大混乱し、対応できずに大敗した。ある者は甲冑を棄て山谷にネズミのように身を隠した。またある者は先を争って河に入り溺死した。勝ち関は天地に轟き、賊軍は勝ちに乗じて後続の官軍に迫った。後続の官軍は前線の官軍が敗北したのを見て、皆自壊し

た。河の北岸にいた官軍も遠くからこの様子を見て潰滅した。哥舒翰^{かじよかん}は単独となり麾下の数百の騎兵と逃走した。首陽山の西から渡河し、潼関に入った。潼関の外側には3本の塹壕があり、いずれも広さ2丈、深さは1丈（＝約360cm：当時の基準で）あった。人馬はその中に落下し、たちまち塹壕は埋まってしまった。残った軍人はその上を渡った。士卒で潼関に入った者はわずか8千余りだった。辛卯（7月10日土曜日）、崔乾祐は潼関に進攻し、これを打ち破った。

哥舒翰^{かじよかん}は関西駅に着き、官軍の傍（ふだ）を掲げて敗残兵を集め、再び潼関を守備しようとした。蕃将の火拔帰仁^{かばつきじん}ら百余騎は駅の周囲に馳せ参じ、潼関に入って哥舒翰^{かじよかん}に言った。

「賊軍が迫り来ますぞ。公は馬にお乗りください。」と。哥舒翰^{かじよかん}は馬に乗って駅を出た。帰仁は軍団に叩頭して言った。「公は20万の兵をこの一戦で喪失したのに、何の面目で天子に謁見するのか！公とて高仙芝や封常清がどうなったのかをご覧ください。公は東へお行きくださいませ。」と。哥舒翰^{かじよかん}はそれはできないとして、馬を降りようとした。

火拔帰仁^{かん}は翰の足を馬の腹に毛でくくりつけた。すると諸将の中の裏切り者達が、東へ落ち延びようとした全員を捕らえた。すでに到着していた賊軍の将である田乾真に会い、ついに降伏した。そして捕らえた者達を洛陽に連行した。安祿山は哥舒翰^{かじよかん}に問うた。「汝は常に我を軽んじていたが、今はどうかな？」と。哥舒翰^{かじよかん}は地面に伏して言った。「臣（わたし）の肉眼は聖人を認識せずにいました。今、天下はまだ平穏ではありません。常山には李光弼、東平に李祗^{りし}、南陽に魯晁^{ろいく}がいます。陛下が臣（わたし）を留め置き、尺書^{せきしよ}（短い手紙）を書かせこれらを招けば、日を待たず皆陛下の軍門に下ることでしょう。」と。祿山は大喜びして哥舒翰^{かじよかん}を司空と同平章事に任命した。火拔帰仁には「汝は主人を裏切った不忠不義の者だ。」と言い、捕らえた上で斬った。哥舒翰^{かじよかん}は諸将を招く手紙を書いたが、皆譴責の返事が来た。安祿山は効果がないことを知り、洛陽の苑中に幽閉した。潼関はすでに敗北した。ここにおいて、河東、華陰、馮翊^{ひようおう}の上洛していた防禦使は皆郡を棄てて逃走した。所在の守備兵も皆退散した。

この日、哥舒翰^{かじよかん}の麾下は急を告げに来たが、玄宗はその時謁見しなかった。李福徳ら将や監牧兵を潼関に行かせただけだった。日暮れになり、平安火（無事を知らせる合図の烽火）がないので、玄宗は懼れ始めた。壬辰（7月11日日曜日）、宰相の楊国忠を召して今

後の対応をはかった。楊国忠自身、劍南（四川省）の出身だったので、安祿山の謀叛を聞くや即刻、副使・崔圓にこっそり皇帝用の身の回りの道具を揃えさせ、緊急避難先として準備していた。ここに至り蜀への御幸を首唱した。玄宗はこれを是認した。癸巳（7月12日月曜日）、楊国忠は朝堂に百官を集め、恐慌から涙を流しつつ、策略について問うた。皆ただただ答えないでいた。楊国忠は言った。「人が祿山の謀叛の危険性を訴えて、もう10年にもなるのに、陛下はこれを信じなかった。今日の事態は宰相の過ちではない。」と。

楊国忠は杖を下げた（朝廷では罷免のこと。則^{すなわ}ち左右に3人ずついる儀仗を持った衛兵に暇を出すこと）。士民は慌てふためき奔走したが、行くべき所を知らなかった。市中は閑散と静まり返った。楊国忠は韓と號^{かく}の両婦人を宮廷に入れ、玄宗に蜀に入るよう勧めさせた。

甲午（7月13日火曜日）、百官で登朝した者は1、2割もなかった。玄宗は勤政楼に御幸し、居並ぶ百官に、親征をしたいと伝えたが、聞いた者は誰もこの話を信じなかった。京兆尹（都の近郊を管轄する行政長官）・魏方進を御史大夫兼置頓使に任命し、京兆少尹で靈昌の崔光遠を西京（東京の洛陽に対し、長安を指す）留守に充てた。將軍の辺令誠は宮^{きゆう}

闈（宮中の后妃の居所）の管鑰（鍵）を掌握した。劍南節度大使の潁王・澣（ゲキはゞでなく王編）に赴任地の鎮守を託し、本道の整備と皇帝の御座を準備させた。この日、玄宗

は北内（玄武門の中にある施設）に移動した。既に夕暮れとなり、龍武大將軍・陳玄礼に六軍を整備するように命じ、厚く錢帛を下賜した。閑（実用的でない、暇）の厩舎から900頭余りの馬を選んだが、外部でこのことを知る者はいなかった。乙未（7月14日水曜日）の黎明、玄宗は貴妃姉妹、皇子、妃、主、皇孫、楊国忠、韋見素、魏方進、陳玄礼及び身近に仕える宦官、宮人が西側にある延秋門を出た。在外者の妃、主、皇孫は皆これに委ねて去った。玄宗が左蔵を過ぎようとした時、楊国忠はこれを焼き払いたいと請願し、言った。「賊のためにそのままにしてやることはありません。」と。玄宗は愀然（qiao[3声]ran[2声]；厳しい顔つきになる、不愉快になる）として言った。「賊が来て何も取れ

なければ、必ずや百姓（庶民）への苛斂誅^{か れんちゆうきゆう}求を増加する。これは賊に与えるべきだ。吾

が赤子^{せきし}に困窮を重ねてはならない。」と。この日、百官の中には猶も入朝しようとする者がいた。宮門に着くと、猶も声が漏れ聞こえ、三衛も儀仗を持って厳めしく立っていた。門は既に開いていたが、宮人が乱れ出て、騒然となった。玄宗の居場所を知らないからである。ここにおいて王公、士民は四散し鼠^{ねずみ}のように逃亡した。山間の細民（下層階級の人々）は争うように禁中や王公の邸宅に入り、金品財宝を盗んだり、驢馬に乗ったまま宮殿に上がり込んだ。また、左蔵の大盈庫（皇帝の私庫）を焼き払った。崔光遠と辺令誠は

軍に消火活動をさせた。また摂府と県官を募り分担してこれを守らせ、暴徒 10 人余りを殺し、ようやく落ち着いた。崔光遠はその子を東に派遣し安祿山に会見させた。辺令誠も安祿山に管鑰（鍵）を献上した。

玄宗が橋を渡っていた時、楊国忠が橋を焼き払わせようとした。玄宗は言った。「士民や庶民が賊から逃れ生きようとしているのに、どうしてその路を絶つことができようか。」と。内侍・高力士を留め、橋を絶とうとする者を追い払ってから玄宗の元に合流させた。玄宗は宦官の王洛卿を先に行かせ、向かう先の郡県に準備するように告知させた。食事時に咸陽の望賢宮に到着したが、王洛卿と県令は共に逃亡していた。中使に呼び出しに行かせたが、官吏でこれに応ずる者はなかった。昼に向かう中、玄宗はなおも食事にありつけなかった。楊国忠が市場から胡餅（今日の蒸餅で饅頭やパンに相当する）を購入し献上した。ここにおいて民は争うように麦や豆の混じった粗末な飯を献上した。皇孫の面々は争うように手づかみでこれを食べ、瞬く間に平らげたが、まだ満たされなかった。玄宗は食事を提供した皆に対し、すぐに報酬を出し、慰労した。居合わせた者達は皆泣き、玄宗も涙した。老父である郭從謹が進言した。「祿山が謀叛の考えを秘かに宿していたのは、断固、一日の話ではありません。闕（宮殿）に参内してその謀（はかりごと）を警告する者もいました

が、陛下は往々にしてこの者達を罰したため、その姦逆（邪（よこしま）な野心）を増長させました。そして陛下はこのような状況に到ったのです。先王が広く聡明をもって、忠実で良心的臣下のもとへ努めて足を延ばしたのは、まさしくこのためだったのです。臣はなおも記憶しているのは、宋璟（そうけい）が宰相となり、何度も進んで陛下に直言し、天下が安定できたことです。

この頃と言え、朝廷において臣下は諫言を忌避し、阿諛（あゆ）追従（ついしやう）しその場をやり過ごすだけとなりました。これで闕門の外のこと（宮中の外の情勢）について、陛下は何も知らなくなりました。草莽（そうもう）や下野の臣は必ず今日の事態が起きることをずっと前から知っていました。しかし、九重（宮城のある都）は厳然として遙か彼方にあり、様々な（区々たる）意見を上に届ける術がなかったのです。事ここに至らなければ、臣はどうして陛下の面前で訴えることができたでしょうか！」と。玄宗は言った。「これは朕の不明によるものである。幾ら後悔しても及ばない。」と。玄宗は老人を慰め諭した。にわかに尚食（宮廷料理長）がお膳を運んで来た。玄宗は先に従官に与えるように命じ、その後で食事をした。軍士に食料を調達するため方々の村落に行かせたが、皆が戻らない内に出発した。夜半過ぎに金城（陝西省興平市の古称）に至った。ここの県令も逃亡していた。県民も皆、着の身着のままで脱出していた。飲食物（きべい）や器皿（きべい）がそのままあったので、士卒は自給できた。この時、従者の多くが逃亡した。内侍監の袁思芸も逃げ去っていた。駅中には灯りがなく、貴賤の別なく枕を寄せ合い就寝した。王思礼は潼関からここまで到着し、始めて哥舒翰（かじよかん）が

捕らわれたことを知った。王思礼を河西・隴右節度使に任じ、すぐ鎮守に向かわせた。そして離散兵卒を集めさせ、東への討伐のために待機させた。

丙申（7月15日木曜日）、馬嵬駅に至り、兵士らは飢えと疲労で、皆かなり殺気立っていた。陳玄礼はこのような禍を招いたのは楊国忠のせいだと思っていたので、これを誅し

たかった。だから、東宮の宦官である李輔国を介して太子（李亨^{りこう}）に告げたが、太子は今だに決めかねていた。吐蕃の使者20人余りが楊国忠の馬を遮り会見し、食料がないと訴えていた。楊国忠がまだ返答しない内に、軍士が叫んだ。「楊国忠と胡虜（蛮人）とが謀叛を企てているぞ！」と。何者かが弓を放ち、鞍に当たった。楊国忠は馬嵬の西門内まで走ったが、軍士族が追いかけてこれを殺した。亡骸をバラバラに切り裂き、駅門外にその首を

槍の先につるして掲げた。併せてその子にして戸部侍郎・楊暄^{ようけん}及び韓夫人と秦国夫人を殺した。御史大夫・魏方進は言った。「汝らはなぜ宰相を殺害したのだ！」と。兵士はこ

れも殺した。韋見素は乱を聞き出てきたところを反乱兵に槌^た（zhua[1声]；鞭^{むち}[文語表現]）

で叩かれ、頭部の血が地面に滴りおちた。ある兵士が言った。「韋相公を傷つけてはならない」と。これで救われ、難を逃れた。軍士は駅を包囲した。玄宗は騒擾を聞き、外で何事が起きているかを尋ねた。近衛兵は楊国忠の反乱と答えた。玄宗は杖をつきながら駅門に出て、軍士を慰労し、隊に戻るよう命令したが、軍士は応じなかった。玄宗が高力士に事情を問うと、陳玄礼が答えた。「楊国忠が反乱を謀ったのに、貴妃がご同行されるの

は宜^{よろ}しくありません。陛下は恩情を裁ち切り、法を正しますようお願い申し上げます。」

と。玄宗は言った。「朕自らがこの処分に当たる。」と。門に入り、杖に寄りかかり首を

傾けながら立っていた。しばらく経って、京兆司録・韋諤^{いがく}が前に進み出て言った。「今、兵士の怒りを抑えるのは困難で、生きるか死ぬかの瀬戸際において一刻の猶予もありません。どうか陛下は速やかにご決断を。」と。諤は叩頭していたので、頭から流血していた。玄宗は言った。「貴妃は常に宮中深くに居たのだぞ。どうやって楊国忠の謀叛の企てを知りうるのだ？」と。高力士は言った。「貴妃は誠に無罪でございます。しかし将士はすで

に楊国忠を殺^{あや}めたのです。このまま貴妃が陛下のお側にお仕えし続けて、どうしてご自身が安泰でいられましょうか！どうか陛下はよくよく御聖断下さいませ。将士の安寧は則ち

陛下の安泰であります。」と。玄宗はついに高力士に貴妃を仏堂に引き入れ、縊^{くび}り殺すよ

うに命じた。亡骸は輿に載せられ、駅の庭に置かれた。陳玄礼らをこれを見に来るように召した。陳玄礼らは甲冑を脱ぎ、頭を深く下げ、自分達の罪を罰するようお願いした。玄宗はこれを慰労し、暁に軍士を諭した。陳玄礼らは皆万歳を叫び、丁寧にお辞儀をして退出した。ここにおいて、ようやく部隊は目的地に行くために整った。韋諤は韋見素の子であ

る。楊国忠の妻である裴柔、幼子の晞^き及び虢^{かく}国夫人、夫人の子である裴徽は皆逃げ出し、

陳倉（陝西省宝鶏市の市轄区）に至ったが、県令の薛景仙^{せつけいせん}が率いる吏士が追跡して捕らえた。そして、全員誅した。

丁酉（7月16日金曜日）、玄宗は馬嵬を出発しようとした時、朝臣は韋見素だけだったので、韋諤を御史中丞に任命し、頓使（ひたづかい；副使をつけず、たった一人で使者をやることを疎んじていう単語）に充当した。将士は皆言った。「楊国忠は謀反人です。その將軍や官吏は皆、蜀にいます。行くわけにはいきません。」と。あるものは河、隴方面行きを進言し、あるものは靈武（寧夏回族自治区銀川市に位置する県級市）行きを進言し、あるものは太原行きを進言し、あるものは都へ帰ることを進言した。玄宗の意向は蜀に入ることであったが、意見の異なる一行の心中を慮り、竟^{つい}に向かう先を言わなかった。韋諤

は言った。「都に帰還すれば、さしあたり賊を禦^{ふせ}ぐための備えが必要ですが、今は兵が少なく、東に向かうのはまだ容易ではありません。扶風（陝西省にかつて存在した郡）まで行き、ゆっくりと去就を検討するべきです。」と。玄宗は一行に諮詢すると、一行は是認し、これに付き従った。父老が皆、道を遮って留まるように願い出て言った。「宮闕は陛下の家住まい、陵寢は陛下の墳墓ですぞ。今これらを捨てて、何をなされたいのですか？」と。玄宗はよく考え、しばらく轡を動かさなかった。それから、太子に後で父老を安撫慰

勞するように命じた。父老は古くからの物事に則^{したが}って言った。「至尊^{しそん}（天子）がもう留まらない以上、某^{それがし}らの宿願は子弟を率い、殿下に従い東の賊を破り、長安を取ることにあります。もし殿下と至尊が皆入蜀すれば、中原の民は誰を主にしなければならないのですか？」と。わずかの間に一行は数千人になった。太子は父老の願いを叶えることができないとして言った。「至尊は遙か險阻の地を突き進もうとされています。吾が朝夕お側を離れることが耐えられましようか。それに吾はまだ至尊^{おんまへ}の御前にて別れの挨拶を済ましていません。すぐに戻り至尊に告白してから、勇気を振り絞り進むのを止めるつもりです。」と。太子は涕泣し、馬を西へ進めようとした。建寧（陝西省府谷県にかつて存在した県）

王・倓^{たん}と李輔国は鞆（おもがい、くつわ）を握って諫言した。「逆賊の胡人が宮殿を侵犯し、四海は分裂崩壊しています。人情（民心）に因らないで、どうして復興できましようか！今、殿下が至尊に従い蜀に入った時、もしも賊兵が棧道を焼き絶とうものなら、中原の地が賊に授かるのを手を扶^{こまね}いて見るだけです。人情（民心）が一度離れば、取り戻すことはできません。この地に帰りたいと思っても、どうしてそれが叶いましようか！西北の辺境を守備する兵を収め、河北の郭と李に呼びかけ、力を併せて東の逆賊を討つべきです。両方の京を奪還すれば、四海を平定し、社稷を危機から安定を取り戻せます。破壊された宗廟を再建し、禁中を掃き清めて至尊をお迎えすることが、大人物の孝ではありませんか！どうして取るに足らない孝養が必要なのですか。女々しいですぞ！」と。広平（河

北省邯鄲市の県)王・^{しゆく}俶も太子に留まるよう勧めた。父老と共に太子の馬を抱きかかえ、行かせようとしなかった。太子は広平王・俶を玄宗への伝令に行かせた。玄宗は轡を^す総べて太子を待ったが、ずっと来ないので、偵察に行かせた。戻ってきた偵察者が状況を報告し、玄宗は言った。「これも天命なり！」と。そして後軍2千人及び飛龍厩馬を分け太子に従軍させ、将士を諭した。「太子は仁孝があり、宗廟を奉ずることができる。汝らはよく太子を輔佐せよ。」と。また太子に伝言を介して諭した。「汝はこれに努め、吾を心配することなかれ。西北諸軍は吾が平素より厚く手^{てなす}懐けている。汝は必ずその者達の力を得よ。」と。太子は南面して号泣するばかりだった。また太子に東宮内人を送り、宣旨(せんじ)で位を授けたかったが、太子は受け取らなかった。俶と俛はいずれも太子の子である。

4. 己亥(7月 18 日日曜日)、玄宗は^{ぎさん}岐山(陝西省宝鶏市に位置する県)に至った。賊の先鋒隊がやって来ると言うので、玄宗は急遽通過し、扶風郡に宿泊した。士卒は去就を心中懸念し、往々にして不遜な言動が流れたが、陳玄礼は制御できなかった。玄宗はこの事態をととても憂えた。折しも、成都から春をモチーフにした綾織物(春綵)十余万匹(1匹=約 9.4m)貢いで来た。玄宗はこれを全部陳列するように命じた。そして将士に入ってくるように召し、軒の側で諭した。「朕は近頃^{すいもう}衰耄(年をとって衰えること)し、任務を託すべき人選を誤った。逆胡の乱を招き、その^{ほこ}鋒先を避けるために遠くまで来た。卿らは皆突如朕に従ってくれたことを知っている。そのため、父母や妻子との別れの挨拶すらできず、野宿してここまで来て、甚だ労苦をかけていることに朕は^{ざんき}慚愧の念に堪えない。蜀への路は陰しく長い。郡県の規模は狭小で、人馬の集団が多ければ、供にできないかもしれない。今卿らがそれぞれ家に帰る希望を聴きいれる。朕一人と子、孫、中官は前進し蜀に入る。どう行くかは卿らの自由だ。今日、卿らと決別する。資糧を備えるためにこの綾織物(綵)を一緒に分けよう。もし帰ったら、父母や長安の父老に会い、朕のためによりしく伝えてくれ。それぞれご自愛してくれたまえ！」と。涙で襟が濡れた。一行は皆泣いて言った。「臣(われ)らは生死を問わず陛下に付き従います。二心なぞございません！」と。玄宗はしばらくして言った。「去るも留まるも卿次第だ。」と。これから流言は息を潜めた。

5. 太子は留まったものの、何処へ行くべきか分からなかった。広平王・俶は言った。「日がだいぶん傾いて来た。ここに駐留するべきでない。皆はどうしたい？」と。皆答えなかった。建寧王・倓は言った。「殿下はかつて朔方節度大使でした[213 卷開元 15 年参

照]。任地に到着し出迎えた将軍や官吏について、^{たん}倭はその姓名を大体覚えていました。今河西と隴右の軍は皆、賊軍に敗れ投降した。父兄や子弟の多くが賊軍の中にいて、異図（謀叛の心。異心）を生ずるかもしれない。朔方への道は近く、士馬も全盛です。^{はいめん}裴冕は衣冠の名門一族で、二心は全くありません。賊が長安に入れば方々で掠奪をほしいままにし、他の土地に行く暇がありません。この機に乗じて早く行き、徐々に大挙を図りましょう。これが上策です。」と。軍の皆は言った。「よし！」と。渭浜（陝西省宝鶏市に位置する市轄区）に至り、潼関の敗残兵に遭遇し、誤ってこれと戦闘し、軍に死傷者が甚だ出た。すぐに残った兵を収め、渭水の浅瀬を選んで、馬に乗って渡った。馬のない者は泣く泣く引き返した。太子は奉天（長安から西北に150里のところにある。）から北上した。新平（扶風郡漆県と安定郡鶉觚県を分割して建てられた郡。）まで至った。夜通し300里を駆け、士卒や器械の大半が失われ、軍で残ったのは数百名ほどだった。新平太守・薛羽は軍を棄て逃走したので、太子はこれを斬った。この日、安定に至った。太守の徐穀（穀の几の部分）も逃走したので、またこれを斬った。

6. 庚子（7月19日月曜日）、劍南節度が留任後、崔円を劍南節度など副大使に任命した。辛丑（7月20日火曜日）、玄宗は扶風を出発し、陳倉で宿泊した。

7. 太子は烏氏（寧夏回族自治区固原市）に至った。彭原太守・^{りじゆん}李遵が出迎え、衣と^{きゆう}糗糧（^{りよう}干し飯）を献上した。彭原に至り、兵士を募集したところ、数百人を得た。この日、平涼（甘肅省）に至り、牧馬をご覧になられて、数万頭得た。また、兵士を募集し、500人余を得た。軍勢は少し持ち直した。

8. 壬寅（7月21日水曜日）、玄宗は散関（陳倉の西南にある県）に至り、付き従う将士を六軍に分割した。寿王・瑁らはそれぞれ六軍の将となった。丙午（7月25日日曜日）、玄宗は河池郡（鳳州、陝西省）に至った。崔円は^{しやが}車駕を奉納して出迎えた。併せて蜀で収穫された豊かな農作物も陳列し、武装兵は元気いっぱいになった。玄宗は大いに悦び、即日、崔円を中書侍郎、同平章事、蜀郡長史に任命した所以である。隴西公・^う瑒を漢中王、梁州都督、山南西道の采訪・防禦使に任命した。瑒は寧王・憲の長子にして、汝陽王・^{しん}璿の弟である。

9. 王思礼は平涼に至った。河西の諸胡が乱を起こしたと聞き、戻って、行在（臨時[行幸や反乱など天子が本来の宮殿に不在などの場合]の宮殿としての機能を有する施設）を訪

れた。最初、河西諸胡は河西都護の全員が哥舒翰^{かじよかん}に付き従い潼関で戦没者になったと聞いたので、争うように自立し、互いを攻撃した。実際、都護は哥舒翰^{かじよかん}に従い北岸にいて死んでいなかった。また、火拔帰仁と共に賊軍に投降したわけでもなかった。玄宗は河西兵馬使・周泌を河西節度使に、隴右兵馬使・彭元耀を隴右節度使に任命し、都護の思結進明らと河西と隴右を共同統治させ、突厥の部落を招いた。王思礼を行在都知兵馬使に任命した。

10. 戊申（7月27日火曜日）、扶風の民・康景龍らが自ら率いて賊軍を所轄している宣慰使・薛綏を襲撃し、200余級の首を斬った。庚戌（7月29日木曜日）、陳倉令・薛景仙が賊軍守備隊の將軍を殺し、扶風を占領しこれを守護した。

11. 安祿山は玄宗が急遽西に行幸したとは思わなかった。それで使者を派遣して崔乾祐の兵を潼関に留めるのを止めた。凡そ十日して、孫孝哲に派兵させ長安入りさせた。張通儒を西京留守に、崔光遠を京兆尹に任命した。安忠順に將兵を苑中に駐屯させ、関中を鎮守させた。孫孝哲は安祿山の寵任されているので、当然、実権をもっており、嚴莊と常に権力闘争をしていた。安祿山は孫孝哲のもと、関中諸將を監督させ、張通儒らは皆、制御されていた。孫孝哲は豪快に奢侈をし、果敢に殺戮をするので、賊党は畏れた。祿山は百官、宦官、宮女などを搜して捕らえるように命じ、捕らえた数百人毎、護衛兵を付けて洛陽に送らせた。王、侯、將、相で車駕に付き従わされ、その長安で留守をする家族は嬰兒まで誅殺した。陳希烈は晩節で寵愛を失っていたので、玄宗を怨んでいた。張均、張玘（土偏に自）らは皆賊軍に投降した。安祿山は陳希烈、張玘（土偏に自）を相とし、ほかの朝廷の士も皆官位を授けた。ここにおいて賊の勢いは大いに盛んになった。西は汧（けん）と隴を脅かし、南は江や漢を侵し、北は河東の半分を割いた。賊將は皆粗略獐猛で展望を持たなかった。すでに長安を占拠したことで、志を叶えたと思い込んだ。日夜、酒浸りになり、女色に溺れ、財宝を貪^{むさぼ}るなどにうつつを抜かした。だから、西征する気は起こらなかった。だから、玄宗は安全に入蜀できたし、太子も追撃に煩わされず、北に行けた。

12. 李光弼は博陵を包圍していたが、潼関が守れなかったと聞き、包圍を解いて南下した。史思明は踵を返し背後に迫ったが、李光弼は反撃して撃退した。郭子儀と共に全軍を率いて井陘（河北省石家荘市に位置する県）に入った。常山太守・王侁^{おうふ}を景城に留め、河間団の練達した兵に常山を守らせた。平盧節度使・劉正臣が范陽を攻めようとしたが、到着する前に、史思明が率いる兵に逆に攻撃された。劉正臣は大敗し、妻子を棄て逃走した。士卒の死者は七千余にのぼった。最初、顔真卿は河北節度使・李光弼が井陘を出た都聞いたので、すぐ兵を収め平原に帰還し、李光弼の命令を待った。郭子儀と李光弼は西から井陘に入ったと聞いたので、顔真卿は再び河北への軍事行動を始めた。

13. 太子が平涼に到着してから数日して、朔方留後・杜鴻漸、六城水陸運使・魏少遊、節度判官・崔漪^{さいい}、支度判官・盧簡金、塩池判官・李涵^{かん}は謀議の際、共同で言った。「平涼は散地なので、駐屯地に適しません。靈武は兵も食糧も十二分に富んでいます。もし太子をここに迎え入れられれば、北は諸城の兵を収め、西は河と隴^{けいき}の勁騎（強い騎馬兵）を出陣させ、南進して中原を平定できます。これは万世にわたって賞賛される功績を一時で可能とする方策です。」と。李涵は太子の牋（セン、かきつけ。書簡）をもたせ使者として各地を巡らし、朔方に籍を置く土馬、武装兵、穀帛（穀物と絹織物）等軍にとり数多くの必需品を献上して貰った。李涵は平涼に戻り、太子は大いに喜んだ。やがて河西司馬・裴冕^{はいめん}が参画し御史中丞に任命された。平涼で太子と謁見し、冕裴も太子の朔方行きを勧めた。太子はこれに従った。杜鴻漸は杜暹^{とせん}の族子（続柄）は子である。李涵は李道の曾孫である。

杜鴻漸と崔漪^{さいい}は魏少遊を残した後、宿舍の屋根を葺き、資儲（利潤）を具した。自ら平涼北境界で太子を迎えた。そして太子に説いた。「朔方は天下に強兵がいると評判の土地です。今、吐蕃と講話し、ウイグルは帰順（内附）し、四方の郡県の大半が賊軍に抗戦し堅守しつつ、復興を待っています。殿下は今、靈武で兵をまとめ、長驅に耐えるよう嚮を統御し、四方に檄を広めれば、忠義をまとめることができ、賊軍を葬るのに不足ありません。」と。魏少遊は宮室を盛大に飾り、帷帳^{いちょう}を全部禁中のものに倣い、食膳には山海の珍味を備えた。秋、7月、辛酉（8月9日月曜日）、太子は靈武に到着し、悉く贅沢品を撤去するよう命じた。

14. 甲子（8月12日木曜日）、玄宗は普安に至った。憲部侍郎・房琯が謁見に来た。玄宗が長安を離れたことは、群臣の多くが知らなかった。咸陽に着き、高力士に言った。「朝臣の誰が来て、誰が来なかったのか？」と。高力士は答えた。「張均と張ジ（土偏に自）父子[*訳者註：原文のまま]は陛下から最も深く恩寵を受けており、かつ皇室の血筋に連なっているので、必ず先に来るでしょう。房琯を宰相にすべきという時論がありましたが、陛下は採用されませんでした。また、安祿山がかつてこのものを推薦したことがあります。恐らく来ないものと存じます。」と。玄宗は言った。「どんな事態になるのかまだ分からない。」と。房琯が到着したので、玄宗は張均兄弟について尋ねた。房琯は答えた。「臣（わたくし）が引率して一緒に来ましたが、途中で逗留し進もうとしませんでした。その意向を観察してみると、腹に一物あるようで何も語ろうとはしませんでした。」と。玄宗は高力士を顧みて言った。「朕は絶対こうなることを知っていたわい。」と。即日、房琯を文部侍郎と同平章事に任命した。

かつて、張ジ（土偏に自）が寧親公主と相愛わらずだったころ、禁中に宅を置くのが許されるほど、比肩する者がいないほど寵恩を受けていた。陳希烈が政務を解くように求めてきたが、玄宗は張ジ（土偏に自）宅を訪問して、誰を宰相にすべきかを問うた。張ジ（土

偏に自)は答えなかった。玄宗は言った。「媚殿を愛さぬ訳はない。」と。張ジ(土偏に自)は階段を下りて舞で拝礼した。結局、宰相にしなかったので、張ジ(土偏に自)は快(心が満ち足りないさま)としていた。玄宗もそのことを覚^{きと}っていた。張均と張ジ(土偏に自)兄弟及び桃崇の子で尚書右丞・奕^{えき}、蕭^{しょう} 嵩^{そう}の子で兵部侍郎・華、韋安石の子で礼部侍郎・陟^{ちよく}と太常少卿・斌^{ひん}は皆、才望(才能と人望)で大官にのぼりつめた。玄宗はかつて言った。「吾が宰相に任命するのは、かつて宰相だったものの子弟のみとする。」と。結局、皆、宰相に採用しなかった。

15. 裴冕^{はいめん}と杜鴻漸らは太子に牋(セン：書簡)を献上し、馬嵬の命を遵守し、皇帝に即位するように請願した。太子は許可しなかった。裴冕^{はいめん}らは言った。「将士は皆、関中の出身者で、日夜帰還を願っています。陰しく崎嶇^{きく}(陰しいこと。辛苦すること)たる道程を殿下に付き従いはるばるやって来たのは、尺寸の功を願うがためです。もしも一旦彼等が離散すれば、再び結集することは不可能です。殿下におかれましては社稷の計のため、どうかなんとしてでも一行の心情をくみ取りくださいませ！」と。牋は5回献上され、太子はついに許可した。この日、靈武南楼で肅宗(李亨^{り きやう})が即位し、群臣は舞踏をし、肅宗は涙を流しすすり泣いた。玄宗に上皇天帝の尊号を送り、天下に恩赦を出し、改元した。杜鴻漸^{さいい}と崔漪を並べて知中書舍人事に、裴冕^{はいめん}を中書侍郎と同平章事に任命した。関内採訪使を節度使に改め、安化(甘肅省隴南市武都区の鎮)に統治府を移し、前の蒲関(蒲津関：現在の陝西省大荔^{だいれい}県の東)防禦使・呂崇賁^{ろ そうふん}をこれに任命した。陳倉令・薛景仙を扶風太守兼防禦使に任命した。隴右節度使・郭英乂^{かくえいがい}を天水(甘肅省南東部に位置する地級市。西安と蘭州の中間に位置する)太守兼防禦使に任命した。この時、塞上(辺境守備の要塞)の精鋭兵は選抜され賊軍討伐隊に入ったので、老弱の兵しか辺境の守備に残っていなかった。文武官は30人にも満たず、草に蔽われた所に朝廷を建てた。制度は草創期にあり、武人は驕慢だった。大将の管崇嗣が朝堂にいて、闕を背に座り、泰然自若として談笑した。監察御史・李勉はこれを弾劾するよう上奏し、有司(役人。官吏)に繋げた。肅宗は特にこれを赦し、嘆息して言った。「吾は李勉があつて、朝廷は尊敬され始めた！」と。李勉^{り げんい}は李元懿の曾孫である。十日間で、帰順する者は僅かに増加した。

張良娣^{てい}は頭の回転が速く、肅宗の意向をよく理解した。肅宗に付き従い朔方に來た。張

良娣^{てい}は就寝の度にいつも肅宗の前にいた。肅宗は言った。「賊の侵攻を禦ぐのは婦人では無理だな。」と。張良娣^{てい}は言った。「青二才如きは妾を当てるのがよいでしょう。殿下は後から付き従うのが妥当です。」と。靈武に到着し、子が産まれた。三日で起き、戦士の衣を縫った。肅宗はこれを止めて、答えた。「このように妾を自分で養う時ではない。」と。肅宗はこれをもって益々これを憐れんだ。

16. 丁卯（8月15日日曜日）、上皇（玄宗）が制を出した。「太子・亨^{きやう}を天下兵馬元帥に充て、朔方、河東、河北、平廬を領有する節度使とし、南の長安と洛陽を奪還させる。御史中丞・裴冕^{はいめん}を左庶子（注1）の兼任とし、隴西郡司馬・劉秩を試守右庶子とする。永王・璘^{りん}を山南東道、嶺南、黔中（貴州省）、江南西道の節度使とし、少府監・竇紹^{とうしやう}をこの傅（後見）とする。長沙太守・李峴^{りけん}を都副太子とする。盛王・琦^きを広陵（江蘇省揚州市）大都督とし、江南東路及び淮南、河南などを領有する節度都使とし、前の江陵都督府長史・劉彙をこの傅とする。広陵郡長史・李成式を都副大使とする。豊王・珙^きを武威（甘肅省の地級市）都督に充て、河西、隴右、安西、北庭などを領有する節度使とし、隴西太守で濟陰（山東省南西部に存在した県名）出身の鄧景山をこの傅とし、都副大使に充てる。必要な土馬、武器や鎧、食糧や俸給などは独立採算で運営すること。各地で元々節度使であった號王^{かく}・巨らは従来通りの待遇とする。それぞれの任地で官吏及び本路の郡県官吏を置く場合は、自分達で選抜し、その内容を上奏すること。」と。この時、琦や珙は皆、閣（宮殿）に出ず、璘だけが鎮守に赴いた。山南東道節度使を置き、襄陽など9郡を領有した。五府経略使（注2）を嶺南節度使に昇格させ、南海など22郡を領有させた。五溪経略使を黔中節度使に昇格させ、黔中などの諸郡を領有させた。江南を東と西の二道に分け、東道は餘杭（浙江省杭州市）を、西道は豫章（江西省南昌市）などの諸郡をそれぞれ領有させた。先に潼関の守備に失敗したと四方で聞こえた際、玄宗の所在は不明だったが、この制が下って、はじめて玄宗の所在地が分かったのだった。劉彙は、劉秩の弟である。

注1） 庶子；正式な婚姻関係にない両親から生まれた子供を指す。嫡子以外の実子。

注2） 経略使；唐、宋代における官職名。辺境に配置された軍事関係の長官で、唐では節度使が兼務した。宋では、常時配置しなかった。

17. 安祿山は孫孝哲に霍国（山西省臨汾市に位置する県級市）の長公主及び王妃、駙馬（娘婿）らを崇仁坊で殺戮させ、その心臓を安慶宗の霊に捧げた[安慶宗の誅殺については

上卷上年を参照]。凡そ楊国忠、高力士の党派及び安祿山を普段から憎む者達は皆孫孝哲に殺された。その数大凡、八十三人。ある者は鉄棒を頭蓋骨目がけて突き刺し、その流血は街に満ちた。己巳（8月17日火曜日）、さらに皇孫及び郡や県の主二十人余りを殺戮した。

18. 庚午（8月18日水曜日）、上皇（玄宗）は巴西（四川省）に到着した。太守・崔渙が出迎え、謁見した。上皇は語らい、大いに喜んだ。房琯はまたこれを推薦した。即日、門下侍郎と同平章事とした。韋見素は左相に任命された。崔渙は崔玄暉^{げんい}の孫である。

19. かつて、京兆の李泌は幼い頃から鋭い才能の持ち主としてとても評判だったので、玄宗は忠王の遊び相手にさせた。忠王が太子となった時、李泌はすでに長じて上書言事（主君や上官に対して意見書を出したり言ったりすること）するようになっていた。玄宗はこれに官位を与えたかったが、できなかった。太子とは布衣の交わり（身分や地位にこだわらない、心からの交わり。）をし、太子は彼をいつも先生と呼んでいた。楊国忠は李泌を憎み、蘄春^{きしゆん}（湖北省黄冈市の管轄下にある県）に移動させるよう上奏した。後に隠居の身として帰ることができ、潁陽（河南省）に居住した。肅宗が馬嵬から北上する時、使者を派遣して呼び寄せ、靈武で謁見した。肅宗は大いに喜び、轡を連ねて出かけたり、ベッドを並べて就寝した。太子だった頃のように、事の大小を問わず皆、李泌に意見を求め、彼の発言に従わないことはなかった。将相の進退についてまでも彼と審議した。肅宗は李泌を右相にしたかったが、李泌は固辞して言った。「陛下が客友として待遇して下されれば、宰相のように貴^{たつと}い状況なのです。どうしてその志を屈する必要があるでしょうか！」と。肅宗は止めた。

20. 安祿山に従い謀叛に加担した同羅や突厥は長安の苑中に駐屯した。甲戌（8月22日日曜日）、その酋長である阿史那從^{じゅうれい}礼は5千騎を率いて、厩舎の馬2千頭をこそ泥し、朔方へ逃げ帰った。諸胡に策謀を働きかけ、辺地を盗もうとした。肅宗は宣慰使を使者として派遣したところ、投降者がとても多く出た。

21. 賊軍が扶風に兵を侵攻させてきたが、薛景仙はこれを返り討ちにした。

22. 安祿山はその将である高^{こう}嵩^{そう}を勅書を持たせて派遣し、^{そうさい}繒綵に河・隴將士にして大震関^{けんげん}〔隴州汧源県西隴山に位置する〕使・郭英乂をおびき寄せ、捕らえて斬った。

23. 同羅と突厥が逃げ帰ったので、長安は大騒動になった。官吏がねずみのように隠れたので、囚人が脱獄した。京兆尹・崔光遠は賊のため且つ逃げるために吏卒を孫孝哲宅

に派遣し守らせた。孫孝哲は安祿山に告白状を出した。崔光遠及び長安令・蘇震は府と県官十余人を率いて逃亡しに來た。己卯（8月27日金曜日）、靈武に到着した。肅宗は崔光遠を御史大夫兼京兆尹に任じ、渭北に吏民を招き集めさせた。蘇震を中丞に任じた。蘇震は環の孫である。安祿山は田乾真を京兆尹に任じた。侍御史・呂涇（インは彳でなく言偏）、右拾遺・楊綰、奉天令にして安平出身の崔器が相次いで靈武を詣でた。呂涇（インは彳でなく言偏）と崔器を御史中丞に任じ、楊綰を起居舍人（内記の別称。内記；詔勅・位記の起草、天子の行動記録を職掌としていた文章が巧みな官吏が担う官職）と知制誥（天子の命令を起草する官職）に任じた。

肅宗は河西節度副使・李嗣業に將兵5千を率いて行在に赴くように命じた。李嗣業は節度使・梁宰と謀って、緩慢に率いて模様眺めしていた。綏徳府の折衝（府兵の徴集・訓練・動員などをつかさどる軍府の責任者）・段秀実が李嗣業に言ってきた。「君父が急を告げてきたのに、晏然（落ち着いてゆったりとした様）として赴こうとする者がどうしてよいものか！特進するのはいつも立派な男子と言われるが、今日の様子を見ると、女兒のような態度ですぞ！」と。李嗣業は大いに恥じ入り、すぐに梁宰に数回に分け兵を出すように言った。段秀実は自ら副將になり、行在に詣でた。肅宗はさらに安西において、徵兵し、行軍司馬・李栖筠が精銳兵7千を出し、忠義をもって励み、派兵した。

24. 勅令で扶風を鳳翔郡に改称した。

25. 庚辰（8月28日土曜日、二百十日）、上皇（玄宗）は成都に到着した。付き従った官吏及び六軍で到着した者は千三百人だった。

26. 令孤潮は雍丘で張巡を包圍してから40日余りが過ぎたが、朝廷に連絡を取れなかった。潮は玄宗はすでに蜀に行ったことを聞き、また書状で張巡を賊軍に勧誘した。大將は6人いる。官位は皆開府に特進し、兵の勢いからして敵わなし、玄宗の安否が不明な以上、賊軍に投降すべき、と張巡に告げた。張巡は表向き許諾した。明日、堂上に天子画像を設け、將士を率いこれを朝見した。人々は皆涙した。張巡は自分の前に6將を引っ立て、大義をもって責め、彼等を斬った。士卒の心は益々忠勤となった。

城の中には矢が尽きていたので、張巡は黒衣を着せた藁人形を千体余作り、夜城下に吊り下げた。令孤潮の兵は争うようにこれを射たが、しばらくしてそれが藁人形であると気付いた。おかげで数十万本の矢を得た。その後また夜に人を吊り下げたが、賊軍は笑って備えを怠った。しかし、それは500人からなる決死隊であり、令孤潮の陣営に斬り込んできた。潮軍は大混乱し、防壁を焼いて遁走した。張巡軍は10里余追撃した。令孤潮は大いに恥じ入って、兵を増やし雍丘を包圍した。

張巡は郎將（cf.中郎將；宮殿の門戸を守ったり、戦時には戦車や騎兵に充てられる中郎

を統轄する将)・雷万春を城の上で令孤潮に呼びかけさせた。賊軍は弩で射たが、顔面に六本の矢が当たっても不動だった。令孤潮は木偶人形かと疑い、間諜に質問させたところ、大いに驚き、遠くから張巡に言った。「向こうから雷將軍を見て、足下(貴殿)の軍令であることが分かった。天道を何と心得ての振る舞いか!」と。張巡は答えた。「君は人倫をわきまえないのに、どうして天道を知っていると言うのだ!」と。幾ばくも経たないうちに、張巡は出撃し、賊将 14 人を捕らえ、百余人を斬首した。賊軍は夜に遁走し、陳留(河南省)の兵を収め、敢えて出陣しようとしなかった。

この頃、賊軍の歩騎 7 千余が白沙渦(河南省開封市中牟県に位置する地名。『春秋』に記録される沙随[河南省寧陵東北に位置する]の地である。)に駐屯していた。張巡が夜襲をかけ、大いに破った。帰途、桃陵[司馬彪の郡国志によれば、東郡燕県に桃陵がある、という。燕県は唐代では滑州(河南省)胙城県である。]に到着し、賊の援軍 400 余りと遭遇し、これを悉く捕らえた。敵軍を分別し、嬀州と檀州(白檀県。河北省承德市灤平県)出身兵それに胡兵は皆、斬った。栄陽と陳留(河南省)から脅迫され兵にされた者は皆、解散させ元住んでいた場所へ帰した。10 日間で、賊軍の元を去り帰順した民の数は 1 万余戸にのぼった。

27. 河北諸郡はなおも唐のために守っていた。常山太守・王備が賊軍に賊軍に投降しようとしたので、諸将は怒って、馬に毬をぶつけ、暴走するままに踏みつけさせ、これを殺した。この頃、信都(河北省冀州市の唐代における古称)太守・烏承恩の麾下には朔方兵 3 千人がいた。諸将は宗仙運に父老を率いて使者として信都に派遣した。烏承恩を常山鎮守の味方に迎えるためだった。承恩は詔勅がないことを理由に断ったが、宗仙運は烏承恩に説得した。「常山の地は燕と薊を抑え、河と洛へ道路が通じ、井陘の險(難所)であり、敵軍の喉元を締め上げるに足る要衝です。近頃、車駕(天子)は南へ移られました。李大夫(李光弼)は軍を撤収させ、晋陽(山西省太原市)を守っています。王太守は後衛軍を統轄し、城をあげて賊軍に投降しようとしたしましたが、民衆の心は従わず、民とリーダーとの関係は一致していません。大將軍の兵は精気(心身のもとになる気力)は引き締まっており、遠近で敵はありません。もしも御領国のことを思われれば、常山に拠点に移してください。大夫と首尾良く合わさることができれば、軍勢の勢いは強大となり、比肩するものがないほどになります。もしも將軍が疑って行かなければ、設備のないまま、常山は陥落するでしょう。信都だけがどうして安全でいられましょうか!」と。烏承恩は従わなかった。宗仙運はさらに言った。「將軍が拙者の言葉に納得しないのは、きっと我らの兵が少ないことを懼れてのことでしょう。今、人々はとりあえず生きるのではなく、国に報いようとして、競うように団結し、郷村に集まっています。もし、懸賞を出しこれを招

けば、十日としないうちに 10 万人になること請け合いです。朔方の武装兵 3 千余と合わさり参戦すれば、王事を成すのに足ります。もしも、人に授けることで要害の地を捨て、四通（通信網や交通網などが四方に通じていること）の地で自ら安穩^{あんのん}としておられますと、剣戟を逆に持つようなもので、敗北の道を取ることにになります。」と。烏承恩は最後まで疑い決断しなかった。烏承恩は承^{しょうし}玘の族兄（傍系尊属）である。

この月、史思明と蔡希徳の両将は 1 万の兵で南の九門（河北省藁城市の北西部に位置した県名）を攻めた。10 日で、九門は偽の投降をし、武装兵を城の上に伏せていた。史思明が登城すると、伏兵がこれに攻撃した。史思明は城から墜ち、鹿角で左脅（左脇）を負傷した。夜、博陵（河北省保定市）に逃亡した。

28. 顔真卿は蠟で丸めた上奏文を靈武に到達させた。顔真卿は工部尚書兼御史大夫に任命された。以前のように河北招討、采訪、処置使であり、並びにそれらに関する赦書（許可書）が蠟丸で封され顔真卿のもとに届けられた。顔真卿は今回の辞令の内容を河北諸郡に頒布^{はんぷ}した。さらに、河南、江、淮にも頒布した。これによって諸道が靈武に於いて肅宗が即位したことを知り、国への忠誠心はますます堅固になった。

29. 郭子儀らが将兵 6 万人を率いて河北から靈武に到着した。靈武軍は勢力を盛り返し始め、人々は唐王朝再興の望みを持つようになった。八月、壬午（8 月 30 日月曜日）朔、郭子儀を武部尚書と靈武長史に任命し、李光弼を戸部尚書と北都留守並びに同平章事と余如故に任命した。李光弼は景城（河北省沧州市西部にかつて存在した県名）と河間（河北省沧州市に位置する県級市）の兵 5 千で太原に赴いた。

これより先、河東（山西省）節度使・王承業の軍政が修まっていなかったのも、朝廷は侍御史・崔衆を派遣し交代させた。崔衆は中使を秘かに派遣し、王承業を誅殺させた。崔衆は王承業を侮蔑し安易に見ていたのだった。李光弼は平素より崔衆に不平を懐いていた。ここに至り、李光弼に崔衆との交代するようにとの勅が出た。崔衆は李光弼を見て、礼をとらず、兵を交代しないでいた。李光弼は怒り、崔衆を斬って事態を収拾した。軍中は股栗（恐ろしさに足が震えること）した。

30. ウイグルの可汗と吐蕃の贊普相が相次いで使者を派遣し、国を助け賊を討つと申し出た。謝意を表する宴が催された。

31. 癸未（8 月 31 日火曜日）、上皇（玄宗）が制を下し、天下に恩赦が実施された。

北海太守・賀蘭進明は録事参軍・第五琦^{だいき}（人名で琦が名前）を入蜀させ事態を上奏させた。琦は言った。「今、兵を用いるのに当たり、財源の問題が急務です。財源を多く産出するのは江と淮の居住地域です。試しに臣に一職お与えください。軍の欠乏問題をなくし

てみせます。」と。上皇は喜び、即第五琦を監察御史と江と淮の租庸使に任命した。

32. 史思明は九門を再び攻め、辛卯（9月8日水曜日）、これを陥落させ、数千人を斬った。東に兵を率い藁城^{こうじょう}（河北省石家荘市に位置する市轄区）を包囲した。

33. 李庭望が将となり、蕃、漢2万人余を率いて東の寧陵（河南省商丘市の市轄区）と襄^{じょうゆう}邑（河南省周口市に存在した県名）を襲撃した。夜、雍丘城から30里の所に陣営を置いた。張巡は短兵3千人を率いて掩^{えんげき}撃（少数部隊で急襲すること。不意打ち）し、これを大いに破った。大半を殺したり捕らえたりした。李庭望は軍を収め、夜に遁走した。

34. 癸巳（9月10日金曜日）、靈武の使者が蜀に到着した。上皇（玄宗）は喜んで言った。「吾が兄は天に応じ人に順じたのだ。吾に何の憂いがあるのか！」と。丁酉（9月14日火曜日）、制を出した。「今から敕（みことのり）を誥^{こう}（告げる）に改め、表向きは太上皇と称する。四海の軍事や国事はすべて先に皇帝が取り、取捨した情報を朕に上奏せよ。再び上京（長安に帰還）するのを待って、朕は政務に携わらないことにする。」と。己亥（9月16日木曜日、彼岸の入り）、上皇は軒に臨み、韋見素、房琯、崔渙に命じ、伝国の宝玉と文書も持って靈武に行き、皇位を伝授させた。

35. 辛丑（9月18日土曜日）、史思明は藁城^{こうじょう}を陥落させた。

36. かつて、上皇（玄宗）は酒宴（酺宴）の度に、先に太常雅楽坐部と立部を設け、継いで鼓吹、胡楽、教坊、府・県散楽、雑戯を催した。また、山車や陸船に楽人を乗せて往来したり、また宮人を出して霓裳^{げいしょう}羽衣（注1）を舞わしたり、また馬100頭を調教して舞わせ、盃^{さかずき}を銜^{ふく}ませ帝に寿^{こと}ほがせ、また犀や象を入場させ、拝礼させたり、舞わせた。安祿山はこれを喜んで観ていたもので、長安を占領した後で、楽工を捜し、楽器、舞衣、舞踏をする馬、犀、象を全部運搬し、洛陽に詣でるように命じた。

注1） 霓裳羽衣（げいしょう・うい）；薄絹などで作った軽やかな女性の衣装のこと。虹のように美しい裳^{すそ}と、天人が着て空を飛ぶという羽衣の意。出典：白居易の長恨歌

臣光曰く（私司馬光は言う）：聖人は道徳をもって麗となし、仁義をもって楽と

なす。故に茅茨土階（質素な建物）や悪衣菲食（粗末な衣服や食事）を恥じる必要はない。民の労力を浪費散財して贅沢しすぎることのみ、恐れるべきである。明皇は承平を待み、後顧の憂いをなくす。耳目を玩弄し尽くし、巧言令色で窮する者が帝王として富貴であったと言われる者は誰もいないと我は聞く。空前絶後のことをしようとするならば、徒に娯楽に耽溺しないことを誇るべきである。傍にいる大盗人とは、窺竄

（隙をうかがい狙うこと）の心があり、最後まで鑾輿（きらびやかな輿）を乗り回すことは、民の塗炭の苦しみを生むことを知るべきである。華美を人に誇示するものは、適度に満足せず、大盗賊を招くことを知るべきである。

37. 安祿山は凝碧池でその群臣と宴を催した。大勢の楽人が盛大に演奏した。梨園の弟子は往々にしてすすり泣いたが、賊は皆刃物をむき出しにしてこれを睨み付けた。楽工の雷海清は悲憤に耐えかねて、地面に楽器を投げ捨てて西に向かって慟哭した。祿山は怒って試馬殿前に縛り付け、その身をバラバラに斬り捨てた。

安祿山は市井の民が混乱に乗じて宝物庫から多く盗んでいることを聞いていた。長安を得た後、命令を出し三日間の大搜索で、その私財までも悉く掠奪し尽くした。さらに府県の役人に命じて、銖兩（わずかな金額）の物すら手元に残すことは困難だった。捜査され逮捕された人は次々と引っ立てられ、家計を維持するのに窮しない者はいなかった。巷は騒然とし、唐王室へますます思慕を深めた。

肅宗は馬嵬から馬で北上した。巷では太子が北で兵を集め長安を奪還に来るという噂が流布し、長安の民は日夜これを待ち望んでいた。ある時は驚くべき情報が流れた。「太子の大軍がここまで来ているぞ！」と。皆は走り出し、市内は空になった。賊は遠くを見ると北方に塵芥が巻き起こっていたので、驚いて逃走しようとした。京畿（都の近く）の豪傑は往々にして賊の官吏を殺し、遥かから官軍に応じようとした。誅殺してもまた別の豪傑が相次いで絶えず出現するので、賊は制御不能だった。初めの頃、京畿、鄜、坊から岐、隴まで皆賊に付いたが、ここに至り西門の外に敵に対抗するための防塁を築いた。賊軍の勢力範囲は、南は武関を出ず、北は雲陽を通過できず、西は武功を通過できなかった。江や淮から蜀へ貢納したり、靈武に行くものは皆襄陽から上津の道を経由して扶風に向かう際、道をふさぐものはなく、すべて薛景仙の功績である。

38. 壬子（9月29日水曜日）、史思明が趙郡を包囲し、丙辰（10月3日日曜日）、これを突破した。さらに常山を包囲し、十日で城を陥落させ、数千人を殺した。

39. 建寧（陝西省府谷県にかつて存在した県）王・倓^{たん}はとても果敢で知略があった。肅宗に付き従い馬嵬から北に行った。兵団は少なく弱かったので、度々盗賊団に遭遇した。建寧王・倓^{けんねいおう たん}は自ら驍勇の兵を選び、肅宗の前後に配置し、血戦して肅宗を防衛した。肅宗が食事が喉を通らなかった時、建寧王・倓^{けんねいおう たん}は我ならなくに悲しみ泣いた。軍中の者は皆、これを属^{しよくもく}目（①今後どうなるか、関心や期待をもって見守ること。②目を向けること。）した。肅宗は建寧王・倓^{けんねいおう たん}を天下兵馬元帥に任命し、諸将の東征を統べさせたいと考えた。李泌は言った。「建寧王・倓^{けんねいおう たん}は誠に元帥の才を有します。だが、広平王という、兄がいます。もし建寧王・倓^{けんねいおう たん}が武功を上げれば、広平王を呉の太伯（注1）になさるおつもりか！」と。肅宗は言った。「広平は家督を嗣ぐ者だ。どうして必ず元帥にしてまで重んじねばならないのだ！」と。李泌は答えた。「広平王は今だに正位東宮ではありません。今天下は艱^{かん}難^{なん}にあります。一行の心の拠^より所^{どころ}は元帥にあります。もしも建寧王・倓^{けんねいおう たん}が大功を成し得たら、陛下と雖も跡継ぎにしたい人物だからと言って、その者に付き従い功績を上げた者達が黙っているものですか！太宗、上皇（玄宗）の過去の事例にありますぞ。」と。肅宗は広平王・叔^{しゆく}を天下兵馬元帥に任命し、諸将を皆、その麾下^{きゝか}にした。建寧王・倓^{けんねいおう たん}はこれを聞いて、李泌に感謝して言った。「これこそ、倓^{たん}の心からの望みである！」と。

注1） 太伯；周王朝の古公亶父^{せん}の子で長男の太伯、次男の虞仲^{ぐ ちゆう}、三男の季歴、3人共兄弟である。紀元前 12～11 頃の人物。三男の季歴その子昌（文王）が優秀で父が後を継がせたいと期待していたのを忖度^{そんたく}し、虞仲とともに南にある荆蛮の地へと自ら出奔した。後に周から迎えが来ても刺青を体に施し、中華に帰るに相応しくない者として拒絶した。太伯は呉を興し、その死後、太伯に子がいなかったので、虞仲が後を継いだ。ちなみに太伯は日本人の先祖という説がある。（訳者補記；このような故事を出すことで、唐王朝の分裂を回避させた意図が李泌にあったと推察する。）

肅宗と李泌が行軍に出た際、軍士が指さし、秘かに言った。「黄衣^{きえ}の人は聖者だが、白^{びやく}

衣の人は平民だ。」と。肅宗はこれを聞いて、李泌に告げた。李泌は答えた。「艱難の際

なので、^{ひざまず}跪いて官吏になるには及びませんが、^{しゑ}紫衣を^{まと}纏って群衆の疑念を絶ってもらいたい。」と。李泌はやむを得ずこれを受け取った。李泌は紫衣を身に纏い、謝意を表しに現れた。肅宗は笑って言った。「もう、このような服を着用した以上、称号なしという訳にはいかないな！」と。懷から勅書を出し、李泌を侍謀軍国・元帥国府行軍長史に任命した。李泌は固辞したが、肅宗は言った。「朕は無理矢理、官位につけたいのではない。ただ、艱難から民を救済したいだけである。賊の平定を待つて、君の高い志のままに行動を任せます。」と。李泌はこれを受理した。禁中に元帥府を置き、広平王・叔が入れば李泌は府にいて、李泌が入れば、広平王・叔も同様にした。李泌はさらに肅宗に言った。「諸將は天子の威光を畏れています。陛下の御前に数回軍事について陳情した際、ある者の^{しよ}所

^{かゐ}懷（心に思っている事柄。所感。）を尽くすことができない、といった万一些細な差し障りがあれば、甚大な害となります。まず、臣と広平王・叔とに熟議させてください。臣と広平王・叔がゆっくりと上奏したことをお聞きに成られた上で、許可するものと不許可のものとをお決め下さい。」と。肅宗はこれを許可した。この当時、軍関係の勤務は繁忙で、四方から報告が上がり、真夜中や明け方の区別がないほどだった。肅宗は悉く府に使者を送り、李泌が先に内容を^{あらた}検め、烽火や機密文書といった緊急を要するものは門を隔てて通り進み、残りは明日まで待たせた。禁門の重要な取り決め（^{やくけい}鑰契）は悉く広平王・叔と李泌が掌握した。

40. 阿史那從礼が九姓府や六胡州の諸胡数万を勧誘し、経略軍の北において集結し、朔方を侵攻しようとしていた。肅宗は郭子儀に天徳軍を出陣させこれを討つように命じた。

左武鋒・僕固懷恩の子・^{ふん}玢に別動隊で賊軍と戦闘したが、敗北し、降伏した。すでに逃げ帰ったが、懷恩は叱り、これを斬った。将士は^{りつぜん}慄然とし、一人で百人に当たらざるを得なかったが、ついに同羅を破った。

肅宗は朔方の軍を用いているとはいえ、外夷の兵を借りて軍の勢力を拡張したいと思った。そこで幽王守礼の子である^{しやうさい}承 栄を敦煌王に任命し、出兵を要請するために僕固懷恩と共にウイグルへ使者として派遣した。さらにフェルガナ（拔汗那）が出兵し、西域諸国の城郭都市全てに説得に巡回させた。賞を厚くすることで協力を取り付けることができ、安西兵に従い救援に入った。李泌は肅宗に勧めた。「彭原に行幸し、西北兵が到着するのを待ち、扶風に行幸を進め、これに応じましょう。庸調が集まった時、軍に供給できます。」と。戊辰（10月15日金曜日）、靈武を発った。

4 1. 内侍・辺令誠が賊軍から逃げ帰ったので、肅宗はこれを斬った。

4 2. 丙子（10月23日土曜日）、肅宗は順化[肅宗が慶州（甘肅省慶陽市及び寧夏回族自治区南部一帯に比定される）安化（甘肅省隴南市武都区の鎮）郡を順化郡に改称した]に到着した。韋見素らが成都より到着し、宝冊を奉上（目上の人に差し上げること）したが、肅宗は頑として受け取らず、言った。「今回の即位は中原が不安定な情勢なので、百官を統制するための暫定処置である。国の危機に乗じて厚かましくも正式に即位するなどありえない。」と。群臣は宝冊を受け取るように強く請願したが、肅宗は許可しなかった。

宝冊は別殿に移され、朝夕おんせいていせい温清定省（訳註）の礼の如く、丁重に扱われた。肅宗は韋見素が元々楊国忠に付いていたので、さほど意に介していなかった。他方、平素より房琯の名を聞いていたので、虚心（心にわだかまりを持たないこと）に彼を待った。房琯が肅宗に謁見し時事を報告すると、悲憤慷慨で感情的になるのを止め、肅宗はこの考えを改めた。これによって、軍事国事の多くを房琯と謀るようになった。房琯も天下を己の任務と見なし、なさぬ事はない、と知られた。諸相は手を拱きこれを避けた。

注1) 温清定省；寒い冬には温かくしてあげ、暑い夏には涼しくしてあげる。また夕方には寢床をきちんとしらせてあげ、朝には朝で挨拶してご機嫌伺いをきちんとする。親に対する態度。出典：礼記

4 3. 上皇（玄宗）は張良娣ていに七宝鞍たまを賜わった。李泌は肅宗に言った。「今、四海は分裂崩壊しています。当座、儉約を人々に示さなければなりません。だから、張良娣ていがこれに乗るのは宜しくありません。その珠玉を取り外し倉庫役人に預けてください。戦功をあげた者に対する賞として取って置くのです。」と。張良娣ていは閤（①婦人の寢室。②宮殿。御殿）の中から言った。「郷里の旧交にも関わらず、ここまで言うとは！」と。肅宗は言った。「先生は社稷の計のためにおっしゃっているのです。」と。勅命によってこれを取り外した。建寧王・倓たんが廊下で泣いているのが、肅宗に聞こえたので、肅宗は驚き、これを召して問うた。倓は答えた。「臣は禍乱が今だに終わらないことを憂えていましたが、今陛下は流れるが如く諫言に従われました。遠からず陛下が上皇を長安に迎えることが見られるます。だから喜びのあまり感極まったのです。」と。張良娣ていはこの一件で李泌と建寧王・倓を憎んだ。

肅宗はかつて李泌と従容（ゆったりと落ち着いたりしている様）として李林甫について語った。諸将が長安を奪還したら、その墓を暴き、骨を焚き灰にしたい、というものだった。

た。李泌は言った。「陛下が天下を定めたなら、死者に復讐して何になりますか！彼の枯

れた骨に何が分かるものですか。徒に聖徳（天子の徳）の不寛容を世に示すだけです[李林甫が東宮に動揺を与えたことについては 215 卷天宝 5 載と 6 載を参照。]。今賊軍に従う者は皆、陛下の復讐を望んでいます。もし今のような事を聞いたら、恐らく心機一転する意欲を阻むことでしょう。」と。肅宗は不機嫌になって言った。「この賊はかつて朕をさんざん危険な目にあわせ、この当時、朕は朝夕を保てないほどだった。朕がここまで全うできたのは、特に天幸によるものだ！李林甫は卿も憎んでいた。ただ、卿に危害を加える前に死んだだけのことだ。何でこれを憐れむのか！」と。李泌は答えた。「臣がどうして知らない訳ありましようか！上皇（玄宗）は 50 年天下泰平にありましたが、一朝にして失い、遠く巴蜀^{はしよく}にいます。南方の風土は劣悪で、上皇はお年を召されています。陛下のこのような勅を聞けば、きっと韋妃のこと[韋妃を廃した故事も 215 卷天宝 5 載を参照。]を思い出し、慚愧のあまり落胆されることでしょう。万一、憤りの感情から病気に罹^{かか}れば、陛下は天下の広大を以てしても、君親を安心させることはできません。」と。発言が終わらない内に、肅宗は涙で顔を濡らし、階段を降り、天を仰いで言った。「朕の考えがここまで及ばなかった。天が先生の発言によって悟らせてくれたのです！」と。ついに李泌の首に抱きつき泣き止まなかった。

他日の夕、肅宗はまた李泌に言った。「張良娣^{てい}の祖母は昭成太後の妹です。上皇（玄宗）は所念（心に思っていること）があります。朕は正位中宮を使わし上皇の心を慰めたいと思いますが、いかがでしょうか？」と。李泌は答えて言った。「陛下は靈武において、群臣は尺寸の功を望みによって、大位に就かれたのであって、私利私欲によるものではありません。皇家の事は上皇の命^{めい}を待ってからでも、数ヶ月間遅れるに過ぎないではありませんか。」と。肅宗はこれに従った。

44. 南詔（雲南省）は安史の乱に乗じて、越巂^{えつけい}（雲南省西部）の会同軍（越巂郡会川県と瀘津関の要路に当たった軍である）を陥れ、清溪関（大定城[貴州省大方県]の北にある）を占領した。

資治通鑑卷 218 唐紀 34 肅宗至徳元載（756 年） 7000 頁にて終了

参考資料

<http://www.geocities.jp/shokatsusei/suiwendi/24.html> （小説で学ぶ世界史と中国歴史＞

玄宗皇帝及び肅宗皇帝)

布目潮颯・栗原益男著『隋唐帝国』講談社学術文庫、1997年10月10日

村山吉廣著『楊貴妃～大唐帝国の栄華と暗転』中公新書、1997年2月